

大智禪師偈頌

鳳山山居

(その二)

―心の旅路―

大智禪師山居の郷より

大智禪師偈頌

鳳山山居（その二）

截斷人間是与非

人間の是と非とを截斷^{せつだん}して

白雲深處掩柴扉

白雲深きところ柴扉をおおう

当軒栽竹別無意

軒に當つて竹を栽ゆ別に意なし

祇待鳳凰來宿時

ただ鳳凰來宿の時を待つ

大智禪師二十年山居の勝跡を志慕して、山に入るのはよいが、山に居住する真の意義を知らなければ無意味なことになるばかりでなく、大變な過ちを犯すことになる。

雲兄水弟。遙かに家郷をさり、永く親族をすて、名利も是非も総て相管せずして細々の行履、條々の威儀、すべからく勤学すべしと雖も、先ずまさに仏祖一件の事を学ぶべし。謂ゆる居山なり。

道元禪師はこのように雲水修行僧に対して懇切なご教示をくだされている。

人間の是非・善惡・利害・得失等を遠く退けて山に入り行持綿密におこないすまして真面

目に修行するということは、実に立派なことではあるが、それだけではいけない、

まずまさに仏祖一件の事を学すべし。

仏祖一件の事とは修行の最要のことである。これを明らかにしておらなければ、何にもならないどころか、先聖にそむき仏法を滅亡させることになる。ではその一件の事とは何か。それは「居山」ということである。山の実相を明らかに山に居住することである。

「山」の真実を究め尽したら「参学の大事」ここに終り、仏道の極地に達したことになる。

山に居住すれば、善悪是非、順逆生死等の人間の世界を断ちきつて寂然不動、心が山の如くなるのだとか、或は山に居住して世間俗界の塵勞欲望から離れるのだというようなことを考えていたのでは、とんでもない誤りであると教諭せられているのである。

大智禪師が塵煙遠く離れた鳳山に住まわれたのはそのような所謂の小乗根性で世間を逃避された訳では決していない。真に国をおもい真の平和な繁栄を希えばこそこのことであり、純忠菊池氏に期待すればこそその山居であつたのである。

国家に真実の仏法弘通すれば、諸仏諸天ひまなく衛護するがゆえに王化太平なり。聖化太平なれば、仏法そのちからをうるものなり。

この道元禪師のお言葉はそのまま大智禪師に正伝されている。従つて鳳山二十年の山居は、

大乘菩薩の山の生活であり、高広なる山の諸功德を雲に乗り風に順つて縦横自在に究め尽されたというべきである。

人間の是と非とを截断して

白雲深き処、柴扉をおおう

これは実は仏祖正伝の坐禅のことを述べられているのである。兀々不動の山のごとき坐禅の姿勢は、おのずから是非等の一切の二見相對の人間世界を超越して、尽天地と一体に活動する仏の徳を具現しているのである。

当軒、竹を栽ゆるに 別に意なし

竹を栽培して、どうするという企画はない。竹のように虚心担懷、無心である。実に竹は君子であり坐禅人である。

ただ待つ、鳳凰来宿の時

竹の実が熟すれば鳳凰が来るといふ。鳳凰は瑞鳥である。群鳥これになびき平和な繁栄をもたらすといふ。竹実にあらずれば食わず、醴泉にあらずれば飲まず、梧桐にあらずんば棲まずといふ。この鳳凰（素晴しい後継者）の来宿を待望するといふのである。因みに鳳来の村名はこの偈による。

今、鳳儀山聖護寺は鳳凰児の来宿を待っている。